

2023年4月23日 礼拝説教要旨

詩編講解説教145「救いを語り継ぐ」

詩編145：10～16、ヨハネ6：48～51

詩編第145編の表題には「アルファベットによる詩」とあります。詩編には「アルファベットによる詩が全部で九つあります（9、10、25、34、37、111、112、119、145）。各節の冒頭の頭文字がアルファベットの順番に構成されていますが、そこには教育的な意図があると言われます。子どもがこれをそらんじることで、文字を覚え、言葉を覚え、さらには神さまの救いの御業を覚えるのです。

かつてイスラエルに行きました時に、偶然、バルミツバ（成人式）の儀式を見たことがあります。ユダヤ人は、男の子は13歳で成人ですが、この時に自分の体と同じくらい大きい律法（トーラー）の巻物を持って街を歩くのです。その儀式で重要なことは律法を朗読することだと言われます。ラビが指定した聖書の箇所をそらんじ、またこれを朗読することで成人と認められるのです。何を持って成人とするのか。日本人は成人したらお酒が飲めるとか、選挙権が与えられるとかですが、ユダヤ人は聖書を読めることで成人とする。これは大きな違いではないでしょうか。

「主よ、造られたものがすべて、あなたに感謝し、あなたの慈しみに生きる人があなたをたたえ、あなたの主権の栄光を告げ、力強い御業について語りますように」（10～11節）ここには神さまの慈しみに生きる人の務めとして、神さまをほめたたえること、そして神さまの主権、力強い御業を語り伝え、神さまの栄光を示すことが教えられています。そのために人は文字を覚え、言葉を覚えるのです。これは単に読み書きができる、いわゆる「識字」ではなく、神さまの言葉を獲得すること。神さまの御業をほめたたえ、語り伝えるために言葉を獲得するのです。だから聖書が読めてこそ一人前なのです。

しかも神さまの言葉は命の言葉です。「言の内に命があった」（ヨハネ1：4）とあります。神さまの言葉は人を生かし、造り上げる言葉（エフェソ4：29）です。そういう言葉を託され、教会は伝えます。近年、AI（人工知能）の発達が目まぐるしいものがありますが、最近、世間を賑わせているものにチャットGPTというものがあります。質問を入力すると、まるで人間が答えたかのように自然な回答をしたり、文章の作成、翻訳などかなりの精度で出来るそうです。便利な一方でやはり問題もあります。大学では学生がこのチャットGPTで論文やレポートを書くことが懸念されています。大学だけではなく、教会でもちょっとした話題になっています。先日、日本基督教団の教師検定委員会の会議でこのチャットGPTが話題になりました。受験生がこれで論文を書く、説教を書くということが起こりうるというのです。もしAIで作った説教で十分ということであれば牧師、説教者は必要なくなるでしょう。でも果たしてそうでしょうか。AIで作った説教は神の言葉足るものなのか。言葉として、文章としては認識出来るかもしれない。でもそこに命が通い合う、人を生かす言葉になるかどうか。そこが問題です。

「あなたの主権はとしえの主権、あなたの統治は代々に」（13節）ここに「主権」とあります。これは「支配」「王国」という意味の言葉です。神さまのご支配はどういう形で現されるのでしょうか。それが次のところですが、「主は倒れようとする人をひとりひとり支え、うずくまっている人を起こしてください」（14節）それは倒れようとする人、うずくまっている人

に寄り添う形で現されます。上から力で支配するのではない。倒れようとするところ、うずくまるところに寄り添うのです。ここには深い「共感」があります。言葉を伝える側がそれを聞く相手に共感する。上から目線では伝わるものも伝わりません。相手に深く寄り添うことによって、その言葉は命を通わせる言葉になります。

説教を作る場合の重要なポイントは、語り伝える会衆をイメージすることです。わたしの説教の一番の聴き手は皆さんお一人お一人です。牧師は皆さんのことを思い浮かべながら説教を作ります。場合によっては具体的にある特定の人を考えながら説教することもあります。悲しみにある人、試練にある人、その人のことを思い、その人に届くように語る。ある意味、オーダーメイドです。ちなみに錦ヶ丘でした説教をそのまま夜の合志豊岡伝道所ではしないこともあります。それは伝える会衆が違うからです。そのように誰かを思って説教する。そこに共感する。それはAIにはできないことでしょう。

そしてこの共感性こそ神さまの言葉の最大の特質と申し上げてよいでしょう。「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」(ヨハネ1:14) 神さまの言葉はその言葉を伝えるわたしたち人間に寄り添うために、言葉を超えて、思いを超えて具体的に肉体を取られた。それがイエス・キリストです。神さまご自身が倒れようとする人、うずくまっている人となられ、十字架で死んでくださいました。そのようにして死の極みに至るまで共感してくださいました。それが神さまの言葉です。だからこそ聖書は歴史を超えてわたしたち人類の魂を養い続ける命の糧になるのです。

「ものみながあなたに目を注いで待ち望むと、あなたはときに応じて食べ物をご覧ください。すべて命あるものに向かって御手を開き、望みを満足させてくださいます」(15~16節) この部分は古代教会以来、食事の時に朗読されたと言われます。もちろんこれを読むわたしたちはこの「食べ物」が誰かを知っています。「わたしは命のパンである」(ヨハネ6:48)とおっしゃったイエス・キリストに他なりません。「御手を開き」というのは「惜しみなく」という意味です。キリストはご自身を命のパンとして惜しみなく、全て与え尽くしてしまわれた。それによってわたしたちを満たしてくださいました。この命のパン、命の言葉をわたしたちはここで毎週受け取り、これで養われ、またこれを伝えていくのです。そしてこの命の御言葉に養われた者は、今度は御言葉を行う者として生き始めます。倒れようとする人、うずくまっている人に寄り添う歩みが始まります。そのようにして神さまのご支配を広げていくのです。今週も神さまの言葉に養われ、これに生きる歩みを始めましょう。

天の父よ。あなたの御言葉は言葉を超え、思いを超えて、わたしたちに深く寄り添われます。それゆえに命を通わせる、人を生かす言葉になります。その御言葉を託されるほどにあなたはわたしたちを信頼し、これを語り伝える務めへと召してくださいます。どうぞこの信頼に応えて、あなたの救いを語り継ぐ務めに生きることができるよう。主の御名によって祈ります。アーメン。